

# 私は病院でキリストに逢った

～endeと～end:～ensと～ent——英語の語源と由来

菅 沼 惇

## 目 次

- はじめに
- I. ～endeと～end
- II. ～end語尾のその他の語について
- III. ～ensと～ent: 外来語系のものについて
- おわりに

### はじめに

本当は「おわりに」の終わりに書くべき類のものようであるが、前回の話の終わりに続くのは今回の「はじめ」の所でもあるから此処にするが、前回の「So, As, Alsoは三姉妹」の原稿を書いて提出した後で月刊『言語』に渡部昇一氏の「dogの語源」（但し縦書き）が出た。氏は色々な著作があり、私も読んだものもあり皆が皆感心しきった訳でもないが、これは学会久し振りの立派な業績だと思った。学生（一般、専門を問わず）には折りが合えばノーベル賞級のものだとPRした。とにかくどんな辞書もその語源欄ではOE docga-?とだけしか出せなかったものを、外国人である日本人が解明した（と私は思っている）のであるから、これでcatをやってみようかなと思う人も出てくるか知れない程であろう（学問の刺激は願わしい）がこれは如何にもdog方式ではいかぬ性質のようである、とにかく殆ど全欧でcat, catte, γατα, cattus, gatto, chat, Katze, kotとか言っておけば通じるのであるから。ではもう純「語史」的には駄目で、前回私が吐かした「微臭い文化史偏向」でしか方法はないのであろうか？大体‘dog’は英国にしか居ないのだから、そこがミソだったのだ。しかし叡智を尽くした興味深々の学説を展開してみせたものではある。まえおきが長くなったが、感激の程である。

今回の私のはふと思いついたまた別の一つの項目についての話である。

## I. ~endeと~end

ふうわりと懐かしい幾年か前の思い出, 俗称「五十肩」の治療をある病院でしている時私はキリストに出会ったのだ。治療室にはベッドが幾つか置いてあるのだが, その中一つが腰部を温めながら伸ばすのであろうか, 時により患者が入っていることがあった, 中央部に特殊装置の付いたものである。そのベッドの側面に金属板があって横文字が書いてある。それが私の目を引いた, そして気を惹いたのだ。Healerとあった。healerとは「人の病気を治癒する者又は機器」(=person or thing that cures a patient of a disease)<sup>1)</sup>という程の意味だろうから, 此処では特殊装置付きのそのベッドが流石に素敵な機器なのだろうと思いつつ, だからこれはキリストだなと思う又一方私にはその頃研究していたしかも専門の学生に「英語史」の講義・演習の際その一部を伝授していたOE訳HEPTATEUCH<sup>2)</sup>の中に時として現れる‘Hælend’という語が結びついていたのである。OE訳HEPTATEUCHでGod即ちse Ælmihtiga God (=the Almighty God, Jehovah) の別称として使われている語は‘Dryhten’で, これは多出する。‘Hælend’はChristを指しての稀出だが, 従って新約(但しOE訳)には頻出する。この語はv. hælānと-end語尾から成る。hælānはModEにhealとして残っている語であるが, 非常に分かり易い用例を選べば次の様に使われていた。

- (1) Ða cwæp se Hælend to him, Ic cume, and hyne gehæle. *Matthew*<sup>3)</sup>  
VIII-7(=Then quoth the Saviour to him, I shall come and heal him.)<sup>4)</sup>

この部分は「lama (=ModE lame, 即ちFr・Lat系の語で言えばpalsy) 病み

注 1) 英文での説明は著者による。

2) *THE OLD ENGLISH VERSION OF THE HEPTATEUCH AELFRIC'S TREATISE OF THE OLD AND NEW TESTAMENT AND HIS PREFACE TO GENESIS*, edited by S. J. Crawford, 1922.

3) *The Gothic & Anglo-Saxon Gospels in parallel columns with the Versions of Wycliffe & Tyndale arranged, with preface and notes by J. Bosworth*, London: Reeves & Turner, 196 Strand. 1888. *Matthew*からの引用は以下全て本書。

4) 以下特に断らない限り, ModE訳は筆者による。

の者がいる。」と言うのでChristが「其なら行って治してやろう。」と言う所であるが、Matthew伝のこの辺り（XVIII～IX～X）は盲人を治したり等民衆の諸々の病いを治す奇跡を施す話の所である。

この‘hælan’という語は（勿論在りと在らゆる語が素晴らしい出発（即ち語源）と波瀾に満ちた変化の、又は平凡な、途中経過乃至は現在の結果を持っているのであろうが）とても素晴らしいことばである。即ちこのhælanはhal（=ModE whole）の同族語なのである。日本でも若い夫婦が初めて愛の結実を眺める時、指は五本揃っているかとか一先ず小さな心配をもしながら心を躍らせるとか聞く。その通り「全き」状態が「健康」の状態なのである。‘hælan’は其ほどのことを素朴に実直に、implicitにではなくexplicitに表していた言葉であったのだ。従って「健康」というのはOEでは名詞化語尾-p（=ModE -th）の付いた‘hælp’（=ModE health）である。

私はこの語を学生に教える時は駄洒落話で導入することになっている。（冗談でも言わないと、どちらかという現実的でない夏炉冬扇趣味の堅苦しい種類の学科目ではそのまま難解な事実を学問の喜びで受容しようとは中々しないのが現代学生気質のようであるからでもあり、更に又人間言語の諸現象が何と冗談の種で満ちていることか！）即ちOE hælanは語尾-anを取り除き、æはaeであるが、そのaeを逆順にしてeaにするとModE healが出来上がるのだが、healやhælを見たり発音したりして何を連想するかというと、音のほうでは先ず日本語の「ひる」即ち「蛭」であり、語形の上でもあの吸血虫のニョロニョロに特にhælの方が似ているし、又漢字も草書体「蛭」にすると何匹かでニョロニョロしている恰好だ。更にはLat. hirudoまで。そうしてその後はどうかという、多分洋の東西を問わず「蛭」で悪血を吸い取らせる等医術に利用することが昔からあったようで、即ち英語でもOEで医術のことを‘læcecræft’即ち「蛭」+「技術」と言っていたのだ、ModE medical scienceはFr・Latから後世入ったものだ。この冗談本当は学問的に正確でない所もあるが可成りのことを言っているのだ。即ちOEDを見るとOE læceは異語源の2語<sup>5)</sup>、一つは‘physician’の意味のものと、もう一つは‘leech’の意味のもの、が同一の語‘læce’に成ったもので、一緒に成るには今私が自己想像の語源アプロー

チをやったようなお互いに引き合い易い意味上の関連が在ったようであるが、  
‘læcecræft’ のは前者の ‘læce’ の方だということになっている。

芋蔓式に色々な小路に入り込んでいたが、本筋に戻ろう。この興味深い実直な語 ‘hælan’ はModEに ‘heal’ として残っている語であるが、ModEではME期にOF経由で入ったLat. 系の ‘cure’ という語があって、EModEではもうTyndalは次例の様に前記の(1)<sup>6)</sup>でcureを使っている。

(1') And Jesus sayd vnto him, I wyll come, and cure him.

そして段々とPres, DayEではどうであろう、cureの方が勢いが良いのではないか？ 高校生は次例の様に ‘cure’ をよく見るであろう。

(2) What cannot be cured must be endured.

以上が ‘Haelend’ 前半部分についての話である。

次にその後半部分 ‘-end’ の話に移ろう。‘-end’ はOE現在分詞 ‘~ende’ 由来の語尾で「行為者」を意味する名詞を造るものである。実際にOEでの ‘~ende’ の方の用例を挙げておく。‘Hælend’ と ‘hælende’ とが一緒に出ているのを出そう。

(3) And se Hælend ymbfor eralle burga……<sup>7)</sup>, and hælende ælce adie,

*Matthew IX*

(= And the Healer went about all the cities……, and healing each disease,)

注 5) Leech (litf), *sb*<sup>1</sup>.

1. A physician ; one who practises the healing art Now *arch.* (chiefly *poet.*) or *jocular* ; often apprehended as a transferred use of LEECH *sb*<sup>2</sup>. In the 17th c it was applied in ordinary prose use only to veterinary practitioners, and this sense survives in some dialects (See also the combs *bullock-leech*, *cow-leech*, *HORSE-LEECH*.etc.)

Leech (litf), *sb*<sup>2</sup>.

Commonly regarded as a transf. use of LEECH *sb*<sup>1</sup>. ; this is plausible, but the forms OE. *lyce*, early ME. *liche*, MDu. *licke*, suggest that the word was originally distinct, but assimilated to *læce* LEECH *sb*<sup>1</sup>. through popular etymology.)

6) Wycliffe版は ‘hele’

7) ……線及び下線は別に断らない限り全て著者による便宜上の省略を表す。

ModEでは現在分詞と動名詞とは‘～ing’で同一形態であるが、OEでは前者が‘～ende’後者が‘～ung’と区別があった。ModGではその姿が見られる。この現在分詞が「～している」程の意味であるからこそ「～している人又はもの」とか「～する人又はもの」へと実直に転化し易い自然な流れは理解し易いことである。これは英語に限らず他の言語にも見られることは少し先で述べることになる。そこで結局この‘Hælend’という語はこの‘hælende’という語から次第に出来たのであろうということになるが、「人の病気を治したり、人を救ったりするもの」と言うほどの意味になる。従って「医者」とか「救世主」と言うほどのことになる。だから新約でChristのことを‘Hælend’と盛んに呼んでいるのだ。ModE healerには辞書によっては「(特にChristian等による治療者)」<sup>8)</sup>とまで記載しているのもあったりする通り実際にChristと関係のある語だったのだ。

その後はOE ‘Hælend’は後世ではME期に入ってきたFr・Lat系の‘Saviour’即ち所謂‘save’するものという語に道を譲っていくのである。

そこで又ModE ‘healer’のように‘-er’語尾で行為者名詞を造る方法はOEにはなかったかという点、それも実際に‘-ere’という形態で次例の通りに存在した。

(4) Iubal wæs..., sangera fæder ⁊ hearpera ⁊ organystra. *Gen.* IV-21

(=Iubal was..., and father to singers and harpers and organists.)

ただこの二例共に興味深いことに皆‘N+-ere’であり、ModEの様に‘V+-ere’ではない。OEでも‘V+-ere’の例も在りはする(cwellere<sup>9)</sup>=ModE killer, fugelere=ModE bird-catcher), 尚*Anglo-Saxon Dictionary*を一寸当ると‘cwellan’はcwellereの外にcwellendと両様あって興味深い。更にModEで-er行為者名詞に成っているものには外にOEでhunta (=hunter), tilia (=tiller)等-a語尾の行為者名詞からの次例等のものがある。

(5) Abel wæs scephyrde, ⁊ Gain eorðtilia. *Gen.* IV-2

8) 中島文雄編『岩波英和大辞典』(1970)岩波書店。

9) R. Quirk & C. Wrenn (1955) *An Old English Grammar*, London, Methuen, p.

(=Abel was a shepherd, and Gain a tiller of the earth.)

以上が ‘Healer’, ‘Hælend’ に纏わる私の話である。

## II. ~endのその他の語について

‘God’ の別称はまだ外にもある。それがしかも ‘~end’ 語尾のものである。‘scyppend’ である。例を挙げよう。

(6) 7 ge forgeaton Drihten eowwerne scyppend. *Deut.* XXXII-18

(=and ye forgot God, your Creator.)

この ‘scyppend’ は v. *scieppan* と -end とから成っており, ‘*scieppan*’ は ModE の shape であるからこれ又ことばの実直な表現であり, 結局全てで「創造主」即ち God のことであり, ME 期に入ってきた Fr・Lat 系の語で表せば ‘Creator’ のことである。

まだある。‘wealdend’ である。次の例に出ているが, 一般の人は中々分かりにくいだろう。

(7) cwæð, ... : Drihten wealdend, mildheort God, ..., ðu þe gehyltst mildheortnysse *Exod.* XXXIV-6

(= And quoth, ...: God the Ruler, mildhearted God, ..., thou which holdest mildheartedness.)

‘wealdan’ は名詞が *geweald* でこれはすぐ Ger *Gewald* を思わせる語であるが, その動詞形であるので ‘rule’ するという意味の言葉である。

まだ外の意味ものでは ‘creopend’ (creeping thing), ‘slicend’ (=creeping thing) ‘libbend’ (=living thing), ‘swefniend’ (=dreamer) 等がある。次の様な文中に使われたものである。

(8) 7 he sy ofer ða fixas 7 ... 7 ofer ealle creopende, ðe striað on eorðan. *Gen.* I-26 (= and he shall be over the fish and... and ofer all creeping animals which stir over the earth.)

この ‘creopende’ の形態であるが, ~e と屈折が現れているが, prep. *ofer* は w. a. d. の性質があり, 後続の rel. 節中の v. が pl. v. であるので, acc.

pl. 屈折語尾である。～end語尾名詞は普通nom./acc. pl. では無屈折であるが時に～e又は～as屈折をする。このcreopende (=creeping animals) はきちんとした語を使えば、この用例文の対応する Vulgate Latin 版でも次に示す様に ‘reptile’ を使っている通り、やはりどうしても所謂 ‘reptile’ のことである。

(8') et praesit piscibus maris et... omnique reptili, quod mouetur in terra!

又 ‘sincend’ は次の用例文に出ている通りである。

(9) Ic adylgie ðone man,..., fram ðam sincendum oð ða fugelas: *Gen.* VI-7

(=I will destroy the man,..., from the creeping animals to the fowls:)

この ‘sincendum’ はprep. framの為にdat. pl. 屈折の-umを成している。先の ‘creopan’ は何方と言うと分かりやすい方だろうが、この ‘sincan’ は一般には分かりにくい語だ。

(10) heo is ealra libbendra modor. *Gen.* III-20

(=she is the mother of all living things.)

これはEfaについての説明の箇所であるが、OEらしい属格屈折表現で、‘libbend’ が本来現在分詞であったぞと告白している様にadjectival<sup>10</sup> gen. pl. 屈折の ‘~ra’ を取り入れている好例である。

(11)<sup>11</sup> Her gæð se swefniend; *Gen.* XXXVII-19

(=Here goes the dreamer;)

その外にももしや何か常日頃我々が使っているModEの語彙の中にも何かひょっとしたらあるか 싶れないと思って探してみたら出てくるかも知れない。‘~end’ で終わる語。そうだ誰でも思い当たる語それは ‘friend’ である。それが思い出せたらその後はその語と一寸遊んで又連想である。ただこれは一寸

注 10) H Sweet : *ANGLO-SAXON PRIMER*, 1953 (1882), p. 15

11) この用例文でgæðを使用しているのでModE訳を一応その通りの語goesとしたが何となく前の語Hereとじっくり行かない筈である。勿論comesの意味に原典も使っている訳で、対応するVulgate Latin版もEcce somniator venit : とvenir (=come) を使っている。一寸した参考まで。

特殊語彙であった——‘fiend’, 昔から英文科生の専用語——の筈だったと思うのだが——それを又知らないのが現代英文科学生気質であったとは!?

ModE friendはOE freond m.のdat. s. 及びnom./acc. pl. での異形態friend(e)乃至はfrynd(e)から引き継がれたものと思うが, OEにはその源となるv. 形 freon乃至freogan, friganがあって‘free’又はpoetic dictionとしては‘love’の意味を持っていたし, またfreo, frig (=free)なるadj. もあった。従ってこのv. 形からpr. p. も造られるし, ~end語尾名詞freondも造られたであろう。

またModE fiendについては, OEにv. feon乃至feogan (=hate)があり, 必要に応じてfeond m. (=enemy, fiend, divil) を造ったものと思われる。

これら二語についてのOE用例は次の通りである。

(12) Iufa pinne freond swa ðe sylfne : *Lev.* XIX-18

(=love thy friend as thyself :)

(13)<sup>12</sup> Ge feohtað wið eowre fynd ⁊ hi hreosað beforan eow. *Lev.* XXVI-7

(=Ye will fight with your friends and they will fall before you.)

此処で英語でのこの話の終わりになる(?)かと思うのだが, この‘friend’と‘fiend’にOE期のこの種の名詞形の化石が残っていたということになる。前回も言ったが化石を見当てるのはハラハラさせる中々の魅力を持っているものである。ただこの二語に化石を見当てたのは私ではない。この二語がそうだと言うことは英語史上の通説であるし, 又従って説明も簡単で言葉のロマンスとして一つの小さな物語とは成っていない。私が自分で突き当たったのは最初の小さな物語‘Hælend’等のものである。

所で上の何処かで一寸触れた通り, 英語においては現在分詞と動名詞とがOE期では‘~ende’と‘~ung’乃至‘~ing’とに区別された形態であったのがME期では受け継いだ‘~ende’が‘~inde’へ, また‘~ung’よりも‘~ing’が優勢になり, 更には‘~inde’と‘~ing’とでは‘~ing’の方が生き残りとなってModEでは分詞・動名詞共に‘~ing’同形となっているの

注 12) 此処まで(2)以外用例文は拙論(末尾に記載) pp 83-4所載を転載か又新採取したもの。



だが、‘~end’ 形名詞までが ‘~ing’ 形へと衣替えしたのではないようだ。だからこそ ‘friend’ は ‘lover’ (13c 造語) と「恋人」と「友人」の一線も画しつつ、また ‘fiend’ は ‘enemy’ (13c 借用) と「鬼」と「敵」とに分かれつつ、しかも ‘friend’ は影濃く、‘fiend’ は影薄く「化石」として残ったのであろう。

### Ⅲ. ~ensと~ent: 外来語系のもの

これはp.129で「~している」程の意味の現在分詞が「~している人」又は機器等へ転化する傾向は人間言語の自然な流れであって英語に限らず他の言語にもある筈で後で述べると予告していたことである。

先ず私がVulgate Latin版聖書で出会ったものには次の語例等がある。

- (14) animantibus (animans命在るもの, のdat. pl.) [animo] *Gen.* I-28, II-19  
 serpentibus (=serpent) [serpo] *Gen.* III-1, 13他  
 uiuentium (vivens生きているもの, のgen. pl.) [vivo] *Gen.* III-20  
 canentium (canens歌うもの, のgen. pl.) [cano] *Gen.* IV-21  
 adolescentulum (adolesculus青年, のacc. s. でadolescensが中に入っている) [adolesco] *Gen.* IV-23  
 oriente (oriens東方, のabl. s.) [orior] *Gen.* XII-8, XIII-14他  
 occidente (occidens西方, のabl. s.) [occido] *Gen.* XII-8, XIII-14他  
 infans (=infant, child) [in+for=not+speak] *Gen.* XVII-12

この素晴らしい語、語に誰しも目を見張るだろう。この中かなりの語が英語に入ったがそれらの語どれを取っても各一語に一ページから数ページの物語が出来ようが、此処ではその中一つ ‘serpent’ の物語にしよう。

‘serpent’ とは「蛇」のことである。「蛇」はOE訳聖書では ‘nædder’ で出て来るが、本当はこれまたこの語に関して一ページかそこらの話になる英語史上の一点のつななのだが、なるべく簡単に言ってもME訳(即ちWycliffe訳)聖書では前版では ‘edder’ (又は時に ‘serpent’) 後版では ‘serpent’ と二様の訳語で現れるが、前者の ‘edder’ は ‘nædder’ をMEで受け継いで使っている中に、人間の「ことば」というものは本当に無限に面白いものである、この

「ことば」の世界に細菌の様にウヨウヨしている所謂「誤解」によって ‘a nadder’ → ‘an adder’ と異分解されてしまうに至って今日の ‘adder’ があるということになっている。そこで ‘serpent’ であるが、今Wycliffe訳聖書で使われ出したことに触れたがその様に Lat. *serpens* から OF *serpent* を経て ME 期に ‘serpent’ として英語に入ったものである。先ずこの語を含む用例文を原典から引いて置こう。

(15) a. Serpens deceptit me, et comedi. *Gen.* III-13

b. Et ait Dominus Deus ad serpentem : *Gen.* III-14

単数主格は *serpens* だが単複共斜格は上例 b. *serpentem* の通り t が付くがどうもこれが Fr (Fr ではこれは発音されはしないが、Lat. 文でも「語」というものはどうも主格でよりも斜格での方が現れ易いのが人間のことばであり、そういうことで ~ent として取り入れられたのであろう。) に *serpent* として取り入れられたのであろう。それから英語にその儘 *serpent* として取り入れられたことになっている。

それから Lat. の現在分詞を一寸見よう。私は元々英語の分詞構文の研究をして来たので Lat. のそれ、特に Ablative Absolute、と係わりがあり気を取られてきた。次例の様なものである。

(16) a. Elevans autom Iacob oculos suos uidit uenientem Esau, *Gen.*

XXXIII-1

b. Qui respondens ait : *Gen.* XXY-23

その様に、Lat では現在分詞形は *amans* (=loving), *monens* (=advising) と ‘~ans’ や ‘~ens’ (ついでに Fr では ‘~ant’, G では ‘~end’ で流石印欧語だなあと言うべき特徴であるが) であって、それが「そのような意味の名詞」に早変わりして使われていたのであって *serpens* もその一例なのである。尚も少し遡ると *v. serpere* (=creep) がその大本にあるのであるから、流石これも人間の実直な表現「這うもの」であったのだ。英語の *adder* や *nadder* は更には遡れない語のようであるが、英語も過去には素朴な実直な表現 ‘creopend’ (=creeping thing) 等を持っていたということは記述の通りである。最近(平成元年11月頃)日本で、寡聞の私でも一寸目を引いたものに、発刊された雑誌

の誌名に面白いのがある。『ANTHROPOS』とか『SAPIO』である。これは知者ぞ知る、前者がGkの「人間」後者がLatの「私は追求する」「私は賢い」であり、すぐにanthropology, Sinanthropusとかhomo sapiensとかを連想させる言葉である。そして此処にも又～ensがあるが、これは現在分詞が分詞形容詞として使われているものである。

さてこの辺で今回の話を終わりにしてよいと思うが、Lat. の典型的な～ens語を幾つか例示しておこう。

|      |             |             |             |            |             |          |
|------|-------------|-------------|-------------|------------|-------------|----------|
| (17) | absens      | assistens   | dominans    | legens     | prominens   | serpens  |
|      | accidens    | audiens     | excitans    | negotians  | purgans     | solvens  |
|      | adolescens  | bellipotens | finiens     | occidens   | radians     | spectans |
|      | agens       | caelipotens | fugiens     | oriens     | refrigerans | texens   |
|      | amans       | consequens  | infans      | parens     | resolvens   | torrens  |
|      | animans     | consonans   | intellegens | ponens     | roborans    | venans   |
|      | ascendentes | continens   | lactens     | praesidens | sapiens     |          |

羅和辞典をほんの何ページかさらさらっと捲ってみれば幾つかの～ens語が出てくること請け合いである。

そして我が英語の方では又々もっと、～ent又は～antで終わる語は一寸目を瞋ってみると、続々思い浮かんで来るはずだ。その殆ど多くが「行為者名詞」なのである。主なのを例示しておこう。そして英語はラテン語だなあとは感ぜずに英語は英語だなあと思って過ごしているのである。

|      |            |               |            |             |             |               |
|------|------------|---------------|------------|-------------|-------------|---------------|
| (18) | accident   | correspondent | gallant    | occident    | Protestant  | servant       |
|      | accountant | crescent      | incident   | occupant    | radiant     | spirant       |
|      | agent      | current       | infant     | omnipotent  | referent    | suprintendent |
|      | antecedent | decadent      | informant  | opponent    | refrigerant | student       |
|      | applicant  | delinquent    | ingredient | orient      | reminiscent | tangent       |
|      | assistant  | dependent     | inhabitant | parent      | remnant     | tenant        |
|      | attendant  | descendent    | innocent   | participant | resident    | torrent       |
|      | consonant  | emigrant      | itinerant  | patient     | resolvent   | variant       |
|      | consultant | equivalent    | lieutenant | president   | restaurant  | vibrant       |

continent    exponent    nutrient    propellent    rodent    visitant

## おわりに

今回はOEの面影がModEに僅かに残る-end語尾の化石の名詞と、それと対照的に夥しく広がる外来語系(Latin系)の同種化石の名詞の話をそれぞれに面白そうな‘Hælend’と‘serpens’の物語を中心に据えて芋蔓式に広がる英語の語源物語とした。

## 引用・参考書目

- 1) Crawford, S. J. (eds. 1922) *The Old English Version of The Heptateuch, Aelfric's Treatise on the Old and New Testament and his Preface to Genesis*, Oxford University Press
- 2) Biblioteca de Autores Cristianos (eds. 1982) *Biblia Sacra iuxta Vulgatam Clementiam*, Mateo Inurria, Madrid.
- 3) Bosworth, J. (eds. 1888) *The Gothic & Anglo-Saxon Gospels in parallel columns with the Versions of Wycliffe & Tyndale*, London ; Reeves & Turner.
- 4) Forshall, J. & Madden, F. (eds 1982) *THE HOLY BIBLE, containing THE OLD AND NEW TESTAMENTS, with The Apocryphal Books, in The Earliest English Versions made from The Vulgate by John Wycliffe and His Followers*, Oxford, at the University Press.
- 5) 菅沼 惇 (1987 b) 「OE訳 HEPTATEUCH 研究—準動詞形について—」『香川大学教育学部研究報告』第1部第70号, pp 83-84
- 6) *THE OXFORD ENGLISH DICTIONARY* published in 1933
- 7) 中島文雄 編 (1970) 『岩波英和大辞典』岩波書店.
- 8) R. Quirk & G. L. Wrenn (1979) *An Old English Grammar*, London, Methuen.
- 9) H. Sweet (eds 1953) *ANGLO-SAXON PRIMER*, 千城書房.